

N a O

秋乃

「さて」

探偵が言う。

「ここからが本当の解決編だ」

「急に何を言い出したか知らんが、本当に解決するのか？」

疑わしげに助手は言う。探偵も、少し困りながら言う。

「んー、多分な。俺はホームズなんだろ？」

「名探偵 皆を集めて さてと言いか。お前はホームズよりどっちかっていうとモリアーティ側だろう？」

ほら、悪い顔してるぞ」

「それくらいは知ってるのな。まあ天才的な所は否定しないが……どうせなるならオレは悪のプロフェッサーよりグレートなティーチャーの方ががいい」

「教師？ お前がか？」

こんな時に何を言い出すのかと、助手は訝しむ。

「上から好き勝手な事を言う奴より、誰かと同じ目線で一緒に歩ける奴にずっとなりたかったんだ」

「まあ、いい台詞を言ったつもりかもしれないが……今格好つけて言うことか？」

探偵は、高らかに笑う。

「ははっ。今じゃなきや言えないことさ、相棒」

「ゼロ！」

カウントダウンが終わると同時に雨ではない水が窓を濡らした。

別に比喻でも何でもなく、鈍い破裂音がしたかと思えば、赤いラベルの付いたペットボトルが泡と液体をロケットよろしく噴き出しながら、高さにして6メートルはあろうかという東校舎二階のここ、図書室まで飛んできたからだ。

「何だ一体……」

にぎやかな声にふらふらと引き寄せられ、眼鏡の少年がベランダの手摺りから音のした階下を覗けば、裾をだらしなく出したYシャツになぜか水泳のゴーグル姿の男子学生たちが諸手を上げて喜んでいる最中だった。その傍には実験に成功するまでに犠牲になったのであろう、口の開いたコーラのボトルが山と置かれていた。

「よっしゃあ！ おい、撮ったか？」

「ばっちり！」

ハイタッチで喜び合う生徒たちの学年までは遠目では分からないが、今現在の時刻は首を向ければすぐ分かる。一六時半……今、三十一分を回った。所謂放課後である。

夏の大会が近づいてきた運動部員はまずいないだろうし、文化系の部や電車の時間まで放課後におとなしく本でも読んでいるような人間があの中に加わるとは考え難い。勿論見物しているギャラリーなどこの眼鏡の少年の他にはいない。

つまりは部活もせず、かといって真っ直ぐ家に帰るでもなく、ただ無為に無意味に青春というページを黒歴史で塗りつぶしていくだけの浪費家が彼らという訳なのだろう。ああ無常。そう少年は詩的に包括した。

「やれやれ」

とは言いつつも、高校にもなってあれだけ自分のしたいことを自由に行ってしまう少年たちを見て、同じ高校生として何も思わない訳でもない。体の中で何かが疼く。

「いかんいかん」

首を振って変な妄想に陥りかけた自分を律する。俺はインドア派だ。

さて余興も終わったとガラス戸を抜けて図書室に戻り、いつもの読書に戻ろうとする少年の耳に、教師らしい野太い男の声が、壁を隔てた隣の教室の方から響いてきた。図書室の隣は職員室だ。

「またお前らかあ！」

「おお今回は早かったな、って当たり前か」

また。今回は。どうやらこの声の主、前科は一つや二つではなさそうだ。

「いいか！ 動かずそこにいろ！ どうやらお前とは一度ちゃんとみっちり膝を突き合わせて話をせんといかんらしいからなあ！」

職員室のガラリ戸が開く音が聞こえると同時に、階下からはてきぱきと冷静な指示が飛ぶ。眼鏡の少年は好奇心に負けて再び外へ。

「よーし、撤収ー。コーラは一人一本さっき決めたやつで……えーじゃない。もったいねーから残してくなよ。晩飯にパイナップルと一緒に鶏肉でも煮込め。あと飯田はさっき撮ったの編集よろしく。んじゃ今日は解散。よし散れー」

間もなくつつかけを履いた大柄な教師が鬼のような形相で実験現場へと到着したが、右を見ても左を見ても嵐のように一瞬で去っていった少年たちの影は既になく、大きく溜息をつくだけで屋内に戻っていった。

視線を感じたのか二階を見上げる大柄教師からそっと隠れるように、少年は口元に笑みを張り付けながら図書室の中へと戻った。斜陽に染まり始めた教室にはもう誰も残っていなかった。

「馬鹿なやつがいたもんだ」

「いやあ……違い、ない……」

ガチャガチャと鍵の開く音にギクリと入口を振り返ると、足元に茶色い水たまりを作りながら膝に手をつき、息を切らしている一人の少年の姿があった。

くせ毛なのだろう明るい茶色で跳ねた髪から砂糖水を滴らせ、水泳ゴーグルを掛けたままの学生。半袖ではなく長袖をまくったYシャツは、後ろがだらしなくベルトより下に飛び出し、学校指定制服のスラックスは膝下まで折り上げられていた。

「誰だ？」

「三年……山田……はあ。馬鹿な事でもしてないとバラ色の人生でも色々やってられなくてな」

「それで？ その山田が俺に何か用か」

質問ではなく突き放す様な強い口調で、眼鏡の少年は奇妙な闖入者に白い眼を向ける。

その服装はくせ毛の少年とは真逆。暑くないのか長袖Yシャツに上着、ネクタイ。裾はきっちり腰の位置にあるベルトの内側へと差し込まれ、スラックスにはしっかりノリが効いている。両のポケットが少し膨らんでいるのは携帯電話などではなく、ハンカチとチリ紙が入っているから。

「もし俺じゃなく図書委員に用事なら、残念ながら今は誰もいない。さっきここを出てどこかに行ったっきりだ」

「今日の図書委員なら二年の磐田だな。あいつは部活はやってないし、毎週木曜は塾で早く帰るからこの時間はいつもいない。大方同じクラスの他の部員に鍵を押し付けにでも行ったんだろう。で、この暑くなってきた時期にエアコンのないこの図書当番を変わってくれる奇特な奴はそういない」

磐田という図書委員とは良く知っている仲なのか、突然来訪したこのくせ毛の少年はそう言って、眼前に銀色の鍵を掲げて見せた。

「俺みたいにな」

「要件は」

「あ、いや、その……邪魔して悪いな」

山田と名乗ったくせ毛の少年は外側にカールした髪の毛を指で弄びながら、眼鏡の少年の棘のある口調に少し傷ついたようにも見えたが、悪いと言いいながらも次の瞬間には砂糖水を滴らせて図書室の中へと上がり込んできた。

「さっきここから見えただろ？」

「何を」

「実験」

「見ていない」

別に、素直にベランダから覗いていたと言えればいいものを、眼鏡の少年がとっさに口にしたのはなぜか小さな嘘だった。対して山田と名乗った少年は、サスペンスドラマの検事か推理小説の探偵が証言にボロを見つけた時のように、ここぞとばかりに責め立てた。

「俺は《見えてただろ？》って聞いたんだ。《見てただろ》じゃあない。あの角度で打ち上がったなら、この教室からは絶対に見えたはずなんだ。わざわざバカでかい声でカウントダウンまでやったしな」

おかげで堀田のヤローにまたありがたーい説教を喰らうコースだ、と山田少年は両の掌を上にして大仰に肩を落として見せた。と、言うが早いか校内放送で呼び出し音の後に先程怒鳴っていた教師の野太い声が流れ、すわ早速かと二人で耳を傾けたが、職員室に呼ばれたのは山田という苗字ではないようだった。

「……ちっ」

「舌打ちは聞かなかったことにしてやる。しかしまあ、なんだかんだ言ってあの鬼の堀田くらいなんだよだな。今のこの学校でちゃんと生徒の話を聞いてやれるセンセイは。ああ、あとは用務員の田所のおばちゃ

んだな。ありゃ今じゃ口うるさいただのババアだが、四十も若い頃はすげー美人だったんだとよ。惜しい」
何が惜しいか。

急にずけずけと入ってきて、誰もいない図書室だからと大声で好き放題言う山田という少年に不信感を募らせつつあったが、他に生徒はおらず、まさかわざわざ自分に用のあって来た生徒を無下にするわけにもいかず、久しぶりに学校で会話らしい会話をしたということもあって、メガネの少年は空いていた椅子に腰を落ち着かせてもう少しだけこのまま話を聞いてみることにした。

「堀田のおっさん、いい歳してるのくせに俺らみたいなクソガキのこともちゃんと見てるからなー。さっきだって俺たちが逃げた後飛び出して来たの、あのおっさんくらいだっただろ？」

「ああ」

言ってから毘だと気がついた。釣り針に見事に食いついてしまったと自覚するとほぼ同時に、山田少年は口角を釣り上げて笑って見せた。

「だから結婚出来ないとまでは言わないが、教師ってやつは身を削る割に見返りが少ない。だから授業外の負担は極力減らしてやらないといけない、そう思わないか？」

さっきロケットを飛ばして怒られていた奴がよく言う。そう思ったが口には出さず、代わりに腕組み足組みをして、相変わらず水泳ゴーグルを掛けたままの少年をしっかりと見据えた。

「何が言いたい？」

大きく溜息を吐きながら質問に質問で返すと、くせ毛の少年の口は一つの言葉を紡いだ。

「俺一人じゃ無理なんだ！ 堀田のおっさんの代わりに助けてくれ、相棒」

弾かれたように顔を上げる。

ゴーグルを外した少年は、日焼けした顔で馬鹿みたいに笑っていた。

「というわけで、依頼人の島田華ちゃんだ」

「自分、二年五組、島田華です！ よろしくお願いします！」

「なんでだ！」

助けてくれなどというから、どうせ悪ふざけにご立腹の教師から匿ってくれなどと言うのかと思っていたのだが、どうやらその予想は大きく外れたらしかった。

半ば強引に連れてこられたのは、校舎西側三階から屋上へと続く階段の踊り場。まだ夏には少しばかり早いとはいえ、陽のある夕方の校舎内はそこそこに蒸し暑い。のだが、今日は曇り空だからなのか、いつもより比較的ひんやりとしているようだった。

グラウンドで声を張り上げ部活動に励む生徒も疲労を顔に滲ませ始めるこの時間帯に、立ち入り禁止で常時しっかりと鍵もかかっている屋上へと向かう暇な人間はまずいない。どうせ一番上まで上っても徒労に終わるのが目に見えているこの場所は、人には言えないような立ち話をするのならうってつけだった。

「で？」

時間が惜しいとばかりにメガネの少年――もとい三年の田中謙二郎は腕組みをして不機嫌そうに山田少年を睨む。

「俺をこんな所まで連れ出して、後輩の女子に会わせて、おまけに何が依頼だ。俺はただの生徒だぞ」

「まあまあ」

瓶の底のような分厚い眼鏡の奥は、三百人くらい目力だけで殺していそうとまで言われたことのある鋭い三白眼だ。失礼な話だったが、事実友達と呼べる人間がいたかどうかについて思い出そうとすると頭が無意識に拒絶するので、謙二郎は考えるのをそこで止めていた。

そんな眼光を真正面から受け止めて、山田と名乗った少年はただ嬉しそうに笑う。

あの対面でどうしてこうなったのかは実は謙二郎自身にもよく分からない。ただ、なんとなく予感がしたのも事実だ。このまま山田と名乗った少年と一緒に行動していれば何かが起きそうな……というか、既に起こってしまった手遅れ感が。

謙二郎はオカルトめいたことが好きではない。だからなのか、そんな目に見えない運命めいた感覚ごときに振り回されるのが嫌で、あえて付き合っこの山田という少年の正体を確かめてやろうとここにいる。結局謙二郎はそう理屈を付けることにした。

物事には全て理がある。来世で運命とやらが証明できるようなら、俺は占い師にでもなってやろう。謙二郎はそう決めた。

「島田とか言ったか。君も頼む人間を間違えてるんじゃないのか？」

というか騙されているんじゃないか？ 山田少年が一向に何も言わないので、謙二郎は仕方なく依頼人だと紹介された少女の方を見る。

一目で運動部だと分かる小麦色の肌の、利発そうな制服姿の少女だった。肩口で切り揃えた黒髪が幾分茶色く変色しているので、染色禁止のこの学校では相当グレているのでもなければ、プールに入れる塩素で髪の色素が落ちる水泳部だろうか？

「いえ！ 間違っていないです！」

そんなことを考えていると、急に力強いファイティングポーズを向けられた。すわ、心の中で考えていることでも見透かされたか。

「行動派で頭も切れると評判の山田先輩なら、きっと自分の親友を救ってくれると信じています！」

「ああ、そっちの話か」

「？」

「いやこっちの話だ。あと拳が近い」

女の子からファイティングポーズを向けられたことなど今まで一度もない謙二郎が突きつけられた拳にたじろいでいると、妙に高い評判の出所が逃げ道を断ってきた。

「まあそういうことだ。まさかかわいい後輩の頼みを無下にするつもりもないだろう？」

いや、多分最初に頼まれたのはお前だろうと思ったが、目の前では背の小さな少女が背伸びをして謙二郎を崇拜の念で見上げている。どうもきな臭くなってきた。

「おい、やまー」

「ちなみに水泳部だ。どうだ、予想は正解か？」

うまく謙二郎を釣り上げた話術といい、掴みどころのない笑みを浮かべているこの少年。ひとの考えをいったいどこまで読んでいるのか。

キラキラした目で謙二郎を見上げる少女に「ちょっとすまん」と断りを入れて背を向け、山田少年を手招きして二、三段階段を下りたところで、謙二郎は小声で話し掛けた。

「俺は人助けをするなんて聞いていない」

「はっはっは。言っていないからな。《助けてくれ》ってしか」

「……」

「駄目か？」

「帰る」

「あ、ちょ！ ちょっと待って！ この通り！ 俺だけじゃ不安なんだ。な？」

「ナオ先輩」

頭上から投げ掛けられた言葉に二人して振り向くと、制服姿の水泳少女は握りしめた両こぶしを胸の前で一つにして、泣きそうな顔になっていた。

「やっぱり、助けてはもらえませんか？ 自分、バイトしてないんでお金なんて大して持ってませんし、代わりに差し上げられる物なんて何も……」

「あー、泣くな華ちゃん！ この目つきの悪い先輩は、今どうしたらかわいい後輩の頼みを聞いてやれるか俺に相談していたところだ」

「ほ、本当ですか！？」

そう言って島田少女は救いの神にでも出会ったような潤んだ表情になる。おかしい。図書室ではこんな妙なことに巻き込まれるなんて思ってもいなかったのに。

「代わりに今度華ちゃんの水着姿を見せてくれればそれでいいそうだ」

「お、おい、ナオ！」

——ナオ？

言って、思考が瞬時に凍り付いた。

ナオ。

なお。

果たしてこの少年をそう呼んだことがあっただろうか。

いや、思い返す限りではないはずだ。

そもそもさっき初めて会ったばかりじゃないか。

なら、なぜ？

この一年がさっき《ナオ先輩》と呼んだから？

だからとっさに俺もそう呼んでしまった。それだけか？

それだけのだ。

そう。

そうだ。

……本当にそれだけだろうか？

俺はもっと他に何か、大事な事を忘れてはいないだろうか。

そう、例えば――。

「起きろ！ このインテリぐるぐる牛乳メガネ」

「先輩？ どうかしたんですか？」

はっと我に返ると二組の視線が心配そうに謙二郎に注がれていた。どうやらよっぽど酷い顔をしていたらしい。

「ドリアンを齧ったときみたいな顔してたぞ」

それはどんな顔だ。

「まさか……本当に華ちゃんの水着姿を想像してたんじゃないかな？」

それを聞いてぱっと頬を赤らめ、年の割に豊満な胸元を腕で隠す仕草をする少女。そんなやりとりで逆に冷静さを取り戻した謙二郎は、溜息を一つついて腕組みをする。まあいい、疑問は後でゆっくりと考えるとしよう。後輩の水着姿でも、球体が受ける水の抵抗でもなく、だ。

「話を戻すぞ。ちゃんと聞くだけは聞いてやるから話せ、ナオ」

それを聞いて一瞬驚いた顔を見せた山田少年――ナオは、謙二郎が真面目に話を聞く気になったのを理解したようだった。さっきまでのふざけた調子は影を潜め、階段の手すりに背を預けると、別人のように真剣な口調で話し始める。その口から発せられた第一声は、衝撃的な内容だった。

「四月頭。新学期初日の事だ。女子生徒がこの先の屋上から飛び降りた」

飛び降りた。屋上から。

ニュースなどではよく耳にしてもにわかには実感の湧かない非日常の言葉に、自然謙二郎の表情も硬くなる。

ナオは刑事さながらに、ポケットから取り出した無地の茶色い手帳を片手で開き、そこに挟まれていた二枚の新聞の切り抜きのうち、一枚を抜き取って謙二郎に見せた。もう一枚は一瞬しか見えなかったが、どちらも飛び降り事件と銘打たれた記事のようだった。

「警察によれば事件性はない。屋上に綺麗に並べられた靴以外には遺書もなく、いじめにあっていた様子もない。家族仲は最近あまりよくなかったそうだが、家庭が崩壊していたというような話は聞かないな」

よく見ようと手を伸ばし受け取ろうとしたが、謙二郎の手が切り抜きに触れる前にナオはさっさとそれを引っ込めてしまう。この程度でしたり顔をするのは止めて欲しい。

謙二郎は屋上へ続くアルミのドアを見る。内開きの取っ手は太い針金でぐるぐるに巻かれ、隣の階段の手すりへと固定されていた。すりガラスには大きく《危険立入禁止》の文字が書かれた紙が貼られていた。どうやら鍵はないらしい。

「その娘が実は他の悩みを持っていたのか？」

最近のいじめは陰湿で根が深いと聞く。携帯電話のトークアプリなんかがいじめの巣窟になっていても、表面化さえしなければ親も教師も気がつかない。悪意が昏い水底から水面まで浮かんでこないのだ。しかしナオは首を横に振る。

「いじめがなかったのは本当らしい。自殺したのは二年になったばかりのことだし、俺も少し調べてみたんだが、いじめの原因となるようなきっかけはまったくもって掴めなかった」

「調べたって？ どうやって」

「決まってる」

そう言って彼は無言で自分の両足を力強く叩いてみせる。足で調べたと言いたいのか、その腕を組むと

目を閉じて薄く笑って見せた。

「おれの情報網を見くびるなよ」

そういえば先程も、明らかに少年と毛色が違うであろう顔ぶれとバカ騒ぎしてつるんでいた。この暴走気味のコミュニケーション力が、彼の行動力の源なのかもしれない。

「で、飛び降りたのがこの娘の言う親友だろうことまでは分かった。それで？ その上で俺に頼みたいこととはなんだ。言い方は悪いが、もう死んでるんだろう、友達」

「はっは一。さすが相棒、話が早い。そんで吐く毒がまたエグい」

一から十まで説明しなくていいのは楽でいいがな、とナオは片目だけ開けて、今度は随分と悪戯っぽく笑う。だれが相棒だと突っ込みを入れかけたが、その眼差しが謙二郎の言葉を待っているようだったので、代わりにまた泣きそうになっていた島田という少女に聞くことにした。喜怒哀楽の分かりやすい少女だった。「俺は探偵でも刑事でもないただのイチ高校生だからな、報酬云々でも責任感諸々でもお涙頂戴でも一切動く気はない。それが大前提で……島田」

「は、はい」

「端的に話せ。俺たちに何をして欲しいと？」

一瞬の、間。

その先には涙を堪え、覚悟のこもった力強い眼差しとファイティングポーズがあった。

「学校の七不思議を解いてください！」

「おい待て相棒！ 帰るな！ ほら、華ちゃんがまた泣きそうになってるから！」

背中越しに首だけ振り返ると、一年生女子がしゃくりあげるように鼻をすすっていた。

「お前な。高三にもなって学校の七不思議って――」

「入鹿ちゃんは好きで七不思議になってるわけじゃありません！ きっと私が……」

馬鹿にしたような謙二郎を大声で遮ったのは島田だった。それっきり階段に座り込んでついにえぐえぐ始まってしまった女の子を放り出してその場を去れるほど、謙二郎はまだ冷血ドライな人間ではなかったようだ。それに数段下から見上げる格好だと、スカートという鉄壁に空いた銃眼よろしく眺めの的にも色々和不味いので、必然、謙二郎は踊り場まで再び舞い戻ることになった。

「おい、ちょっと来い」

「へいへい」

ニヤニヤしたナオを連れて今度は屋上扉の前まで上ると、謙二郎は顔を寄せて話し出す。

「何なんだ？ お前も彼女もいったい俺に何をさせたい？ 七不思議になってるといっているのはどういう意味だ？ それが飛び降り自殺と何の関係がある？ そもそも入鹿とは誰だ？ 早く話せ！」

小声だが自分でも驚くほどの早口になった。オカルトは好きではないが元々好奇心は旺盛な性質なのだ。頭の中が疑問符ではち切れそうだった。

「そんな一気に言うなよ。俺は聖徳太子か。まあとりあえず落ち着けて」

対して、ナオは特に声のトーンを落としたりせず、普通通りの声量で謙二郎に説明する。

「華ちゃんの飛び降り自殺した親友、大和田入鹿は、死んだ後も自分が死んだことを理解できずに、この学校に地縛霊もどきとして憑りついてる。正確には身を投げた場所、この先の屋上にだ。今はまだ悪霊退散ってところまではいってなくて実害は出てないが」

「お前、あの娘の幽霊話なんてまともにとらえてるのか？」

「だって俺が吹き込んだんだもの。……いや、だから帰ろうとするなって！」

「お前がますます信用できなくなってきたぞ。第一な――」

「いいから聞け。このままだと人が死ぬ」

人が死ぬ。

まただ。軽い言動は急に影を潜め、目の前の少年の顔付きが変わる。謙二郎は頬に今まで感じたことのないひりひりとしたものを感じた。思わず開きかけた口を閉じる。

「信じなくても今はいい。だが、今回は場所もタイミングも悪い。時間は悠長に待ってられないだろう」

いずれ彼女に連なる自殺者が出る。

未来がその黒い大きな相貌には見えているように、ナオははっきりとそう言い切ったのだった。

「そこで、だ」

他に誰もいない放課後の階段に、力強い声が反響する。

「これ以上何か起きる前に、おれたちで先に彼女――大和田入鹿の幽霊の説得にあたりたい。お前にはその手伝いを頼みたいんだ。俺一人じゃ荷が重くてな」

「な」

「だがしかし地縛霊もどきとはいえ相手はもう死んでる。数週間じゃあまだ死に立てほやほやもいいところだろう。やれコックリだ、花子だ、と違って手順に沿って呼べば出てきてくれる相手とも思えない」

さん付けはしないんだな。変な所で気が抜けてしまった。

「だから、俺たちは、大和田入鹿の自殺直後から急に広がりだした学校の七不思議の噂から追いかけていこうかと思う。外堀を埋めていくんだ。まあ、急がば回れだな」

幽霊を説得？ 七不思議の解明？ 普通であればなに荒唐無稽な絵空事を語っているんだと一蹴するところだが、不思議とこの少年が力説するとなるほどという気がしてくる。職員室の真下でコーラロケットを飛ばすようなグループのまとめ役。その無駄な求心力は折り紙付きなようだった。

怪奇現象の解明の手伝い。馬鹿なことをと思いつつ、既に少し楽しくなってきた自分の心を乱暴に静めて、努めて冷静に謙二郎は頷いてみせた。まあ、少なくとも暇を潰すくらいにはなるだろう。

「よし目標は今日中に片づける。メンバーは俺とお前と華ちゃんの三人だ！」

「俺は幽霊なんて信じてないぞ？」

「いいっていいって」

調子のいい舌が戻ってきたナオ曰く「お前が役立たずでも、俺は役に立つ。だから万事大丈夫だ！」それで、直接的に役に立たないと言われた謙二郎は、ならなんで俺を巻き込んだと思いつつ、大口で笑う心底楽しそうなナオの前で吐き出すのは溜息一つにとどめるのだった。

「あったぞ。これか？《嘆きのバッハ》」

「それか、バッハ！ いや一俺には誰が誰だかさっぱり分かん」

「うう、自分もベートーベンさん以外はさっぱりです。謙二郎先輩がいてくれて本当によかったです」

「お前らな……」

時刻は午後六時を回った。久しぶりに梅雨の晴れ間が覗いていた一日ではあったが、夕方くらいから徐々に空は陰り始め、いつもなら校舎西側に面しているのもまだまだ明るいはずのこの音楽室も、今日は随分帳が下りるのが早い。

そんな教室の中で呑気な会話を繰り広げている二男一女は、教室の後ろからパイプ椅子を引っ張り出してくると、壁の高い位置に掛かった四角い額縁の中で、眉間に皺を寄せて楽譜を持つ偉大なる音楽の先輩の前に並んだ。

「ちゃんと眺めたことなんてなかったが、いやはや凄い頭してるな。何だこれ。毎日セットにどれだけ時間かけてたんだか」

「ホントですねえ。私ですらこの髪を整えるのに、朝の貴重な睡眠時間を削って早く起きているっていうのに」

「女子は大変だねえ」

どんどん薄暗くなってきた教室でしげしげと昔の音楽家の頭を眺める二人。そんな二人に謙二郎は目を細め、冷や水を浴びせる。

「それ、かつらだぞ」

「何い！？」

「そ、そんな！ バッハさんは……禿げちょびんだったんですか！？」

「ちょびんってなんだ。有名な話だぞ？」

予想以上の反応だったが、謙二郎は説明してやる。

「昔は長い髪の毛はノミやシラミの温床になりやすかったんだよ。中世ヨーロッパの頃は洗髪の手間もなかったみたいだしな。だから自毛は剃るか短くして、その上にかつらを被ることが貴族の中で正装でありお洒落だったらしい」

「へえ。ズラのおっさんもズラのおっさんなりに苦労してきたんだな」

音楽の父とも呼ばれる大バッハ先生をズラのおっさん呼ばわりである。ナオという人間の言動を共にいてしばらく観察してみて、非常に頭の回転の速い――特に洞察力が飛び抜けているらしいことを謙二郎は薄々感じ取っていた。視野の広さ、記憶力、行動力、それらを結びつける応用力も高校生にして非凡の才と言えるかもしれない。

しかしその分興味のない分野には無頓着なようで、今もバッハ先生の右隣の肖像画をショパンだと断言している。違う、そっちはシューベルトだ。

「ほら、暗くなる前に調べるんだろ？」

癪だが、出会って間もないながら不思議と息の合う――相棒と認めるのはノーだが――ナオをせっついて、バッハの肖像画を調べることにする。

そもそも七不思議というからには不思議なことが計七つはあることになる。ナオに確認するとすでに下調べ済みらしく、軽快な口調で教えてくれた。

《笑う姿見》

《嘆きのバッハ》

《図書室の諭吉さん》

《アルエの犬》

《開かずの扉》

《寒い廊下》

そして、

《跳ねるイルカ》

この彩り豊かな現代の七不思議ラインナップを見る限り、おおよそ七不思議と呼ばれることの多いものは《バッハ》と《姿見》《開かずの扉》の三つくらいであろうか。よく聞く、動き出す人体模型や歩く二宮金次郎なんかは一覧にないようだったが、これも時代なのだろうか。

ナオによればそもそもこの学校の人体模型は誰かがぶつかって壊したのか、今はばらばらになって段ボール積みだそうだし、最近では座ってたりジェットを付けて飛んだりもする二宮金次郎は、大多数の高校にはない。二宮金次郎といえば薪を背負い、働きながら苦心勉学をする姿で有名だが、現代では子供が真似して危険だという言いがかりみたいなクレームを受けて取り壊す学校もあるというのだから、時代とはいえあまりに寂しい世の中である。

閑話休題。スチール製の不安定なパイプ椅子に上り大バッハ——本名ヨハン・ゼバスティアン・バッハの肖像画を外して表も裏もしげしげと眺めていたナオであったが、特に何もおかしい所がなかったのか、肖像画を元に戻してパイプ椅子から軽やかに飛び降りた。

「ダメだ。なーんにもにもありゃしない」

嘆きのバッハ。放課後の音楽室に響く、音割れしたG線上のアリア。それは教室に誰もいない時だけ、天井近くの壁に掛けられたバッハの肖像画が漏らす晩年の苦しみの現れであるという——。

「またスピーカーでもあるかと思ったんだが」

「ならシューベルトの方ははどうだ？ 教室に誰もいない時だけ聞こえるなら、本当にバッハの肖像画とは限らないんじゃないか」

「よし」

ナオが椅子を右にズラして再び上る。

「あったか？」

もう一度軽快に飛び降りたナオの手には、ワイヤレスで音を飛ばせる小型のスピーカーが握られていた。

「決まりだな」

「ですね」

「ああ」

三人が三人とも顔を見合わせて頷く。

「この七不思議の噂、誰かが意図的に流している」

この《嘆きのバツハ》を調べに来る前に、三人は既に《笑う姿見》と《アルエの犬》、《開かずの扉》の調査を終えている。その内《開かずの扉》と《アルエの犬》の謎はなんてことのないものだった。

一番最初に向かったのが《開かずの扉》だった。東棟一階東階段物置横にある小さな謎の扉。人間の腰ほどの高さまでの鉄扉にはいつも二つの鍵が掛かっていて、扉の奥がどうなっているかを知る者はいないという。中には第二次世界大戦中の武器弾薬がそのまま残されているとか、学校地下にある秘密研究所の入口があるとか、はたまた誰か重大な罪を犯した人間を入れておく牢屋なのとか、これぞ根も葉もないといった噂話ばかりだったので最初に選んだのだが……結論から言うと、確かに扉の奥は部屋になっていて、そして実際に生きているモノがいた。

この部屋、校舎の側からは嚴重に鍵が掛かっているが、一旦靴を履き替え外に出て、校舎をぐるりとまわってみると、その開かずの場所が階段裏のデッドスペースに作られた小部屋であることが分かる。そして実は外にも校舎外壁と同色のペンキで塗られた開口部が付いていた。こちら分厚そうな金属製の扉だったが、意外にも鍵は掛かっていなかった。

ナオが謎の掛け声で薄汚れたアルミドアを開けると、一匹の柴犬が嬉しそうに一声上げた。首輪はなかったが逃げる様子もなく、なかなか人には慣れていたようであった。ナオがポケットから携帯電話を取り出してその明かりで室内を照らすと、白線を引くラインカーや竹ぼうきといった学校の倉庫にある当たり前の物に混じり、ペット用の餌入れと水、人工の砂の袋、それに小さいシャベルなんかが無造作に置かれていた。

「開かずの扉の先は犬小屋だったってオチですか……」

露骨にがっかりした様子である島田をよそに、ナオは蛍光灯もなく暗い倉庫に躊躇なく入っていく。謙二郎も続いて入ろうとしたが、柴犬がこっちを向いて唸りだしたので、踏み出しかけた足をそのままひっこめた。

「ま、まあ、学校の不思議なんて所詮はこんなもんだろう。大方生徒の誰かが野良犬でも拾って連れてきたってとこか。この辺なら日中でもあまり人気がないし、見つかることも少ないだろうからな」

「いや、生徒の線は薄いな」

言ったのは奥の天井を調べていたナオだった。

「どうしてだ？」

「いくら人目につきにくいとはいえ、可能性がゼロってわけじゃない。こんな校舎裏の倉庫なんて露骨に怪しい場所に入ったりしてる生徒がいて、俺の情報網に引っかからないわけがないだろ？」

「だろ？」と言われても困るが、ナオの洞察には一理あった。

「それに餌や糞尿の処理だって休み時間ごとに来れるとも限らない。餌代やこの砂だってただじゃない。だから可能性を上げるなら、そうだな。頻繁にこんな場所に入ったりしてもまったく怪しまれない人間で、かつ多少は自由に使える金を持っている人間……」

「もしかして教師が――？」

「あ！ 用務員さんですね！」

「はい華ちゃん正解！ お前は没収ー」

何を没収されるかは知らないが、なるほど、教師の方がこんな場所に来ていたら目立ってしまうか、と謙二郎は腕を組んで納得する。下手に熱くならないのは自負している性格だった。

島田が「いえーい」とピースサインを謙二郎に見せつける。熱くはならないが、悔しくないこともないのだが。

「そんでもってもう一つ」

「まだ何かあるのか？」

「見ろ、通風孔だ」

今にも噛みついてきそうな凄い形相の柴犬の横をそろそろと通り抜け、ナオの指さす天井付近を見に行く。携帯電話の薄明りに照らされていた金網のはまったそれは、確かに直径十数センチ四方程度の真っ暗な穴だった。

「確かに通風孔みたいだが……だからなんだ？」

「七不思議のひとつだ。華ちゃん」

「はいっ！」

ナオに呼ばれて条件反射のように背筋を伸ばす後輩少女。

「七不思議の中に、犬に関係したものあったよね？」

「あ、はい。《アルエの犬》ですね」

「その噂の内容は？」

「え？ ちょっと待ってください。えと……確か、放課後になると、東階段の踊り場に張られた盲導犬育成募金のポスターから、犬の鳴き声が聞こえてくる――です」

「そういうことか」

「そういうことだ」

「え？ え？」

まるで分からないといった様子の水泳少女を他所に、謙二郎とナオは顔を見合わせて頷く。

「華ちゃん。ここって場所的にはどこだか分かる？」

「？ 学校の裏ですけど……」

「具体的には？」

「……あ！ 東階段！」

島田も気が付いたようで、豊満な胸の前で両腕をパン！ と合わせて頷く。この少女もなかなかどうして、頭の回転は速いようだ。

「東階段の裏つまりはこの倉庫の上がちょうど《アルエの犬》の七不思議の場所ってことだな。そして倉庫の中では誰かが隠れて捨て犬だか野良犬だかを飼っていて、二点は通風孔という線で繋がっている」

「恐らく踊り場のどれかのポスターの裏には小さな穴でも開いてるんだろうな。そこからこの通風孔を通ったワン公の鳴き声が聞こえる、と。日中の野郎どもの五月蠅さだったら、こんな穴から三階まで上ってきた鳴き声なんて聞こえやしないだろうしな」

「だから《放課後になると――》なんですね！」

唸り続けている柴犬を避けて再び日の当たる世界に出てくると、ナオは躊躇いなく鉄扉を閉めた。謙二郎はもともと獣の類と触れ合うのは好きではなかったが、ナオも餌や水があるから大丈夫だと思ったのか、それとも単に毛でも付くのを嫌ったのか、残念そうにしているのは後輩の少女ただ一人であった。

「こんなところにずっと入れられて、バスカヴィル大丈夫ですかね……」

「バス……何？」

「バスカヴィルです！ あの犬の名前。ほら《バスカヴィル家の犬》ってあるじゃないですか、ホームズの長編に。私、推理小説に最近ハマってて！」

それは名前じゃなくて苗字じゃないのか？ そう思いつつ謙二郎が分からんと首を傾げると、ナオが後を引き継いだ。

「大丈夫だろう、今のところ弱ってる様子もないし。聞いた話によると田中のおばちゃんは昔から犬好きだっていうからな。多分今頃貰い手を探してるだろ。……いやはやしかし、名前を付けるにしても、口から火を噴く魔犬からとはね」

謙二郎にしても架空の名探偵であるシャーロック・ホームズは知っている。その宿敵の名前くらいも……今は思い出せないが多分知っている。読んだことがないだけだ。しかしにやりと笑って癖のある髪の毛をいじるナオと嬉しそうにはしゃぐ島田後輩の様子を見る限り、仲間外れは自分だけ。どうやらナオの評価がまた上がっているようだった。そのナオが謙二郎の方を向いて指をさす。

「なら俺がホームズで、お前は助手のワトスン博士だな」

「誰が助手だ。ほら、まだ調べ物は残ってるだろう。急がないと日が暮れるぞ」

話の流れを遮らんとする謙二郎だったが、そんなものは急流に投げ込まれた小石に等しいようだった。ナオは言う。

「そうだな、次は《笑う姿見》だ。さ、行くぞワトスン君」

名探偵は不敵に笑ってみせるのだった。

そんなこんなで謙二郎たち三人は《笑う姿見》に続いて《嘆きのバッハ》も調べ終え、再びあの屋上へ続く階段まで戻ってきていた。曇り空はとうの昔に暗くなり、部活を終えた生徒もちらほら帰り支度を始めている。学び舎は夜を迎えようとしていた。

「犬関係の二つは後付けとして、姿見とバッハは誰かによって意図的に作られた七不思議だったってわけか」

ナオが自らのくせ毛を指先で弄びながら独り言のように呟く。ホームズなんてイギリス紳士を気取ったせいか、自らの思考を纏めようとしているその姿は探偵に見えなくもなかった。

バッハと同じように、姿見の方にも小型のスピーカーが仕掛けられていた。どちらも数メートル程度の距離から無線で音を飛ばせるもので、学生が買うには多少値が張るが、その辺の電気屋で普通に購入出来る代物だった。残念ながら元のオーディオプレーヤーの方は発見できなかったが、七不思議が作為的に流された噂であることは間違いないようだった。

「でも、誰が何のためにそんなことを？」

島田が階段に腰かけて小首を傾げる。それは最もな話で、こんないたずらに利はどこにあるというのだろうか。

「分からない。が」

「が？」

謙二郎の言に、二人の視線が集中する。

「どうやら今までの七不思議は全部、数合わせな気がするな」

「数、合わせですか？」

「おまけだって言ってるのか？ そりゃまたどうして？」

「ん。まあ、確信はないんだが……《開かずの扉》はともかく《アルエの犬》はそもそもあの柴犬があの場所に飼われていることが前提だろう？ ならあの犬がいつか誰かに引き取られるなりした時点で七不思議では数が足りなくなる。それに後の二つは、スピーカーまで仕込んで無理やり作られていた。なら、残りの三つの謎のどれかを引き立たせるために、あるいはなんとか七不思議の形にするために、他の謎を仕込んだってというのが一番自然だと思う」

その理由までは分からないが、と謙二郎は肩をすくめてみせた。まだ調べていない七不思議は《図書室の諭吉さん》《寒い廊下》《跳ねるイルカ》の三つ。

「謙二郎先輩、いつも図書室にいらっしゃるとお聞きしていますが、諭吉さんなる人とお会いしたことはないんですか？」

「ないな」

後輩の口にした疑問を謙二郎は一蹴する。

「そもそもあの福沢諭吉が化けて出るのか？ たかだか地方高校の図書室に？」

「《図書室で勉強しているとどこからか視線を感じる》って内容だから、恐らくは学問のすゝめで有名な福沢諭吉から名前だけを拝借したんだろう。諭吉先生も、死んだ百年先の一高校生のことまで面倒見てられないさ」

「なら《寒い廊下》は？ お前、勿論内容知ってるんだろう？」

今度は謙二郎の質問にナオが笑って答える。

「《目に見えないが、そこを通るとヒヤッとする場所が学校のどこかにある》って噂」

「胡散臭いな」

「胡散臭いですね」

その場所を探そうと誰も言い出さないあたり、しょうもないオチが待っていきそうというのは共通意見のようだった。するとやはり、島田の親友で故人だという屋上の《跳ねるイルカ》が本命だろうか。

「なあ、ここまで一緒に付き合っておいて何だが……お前本当に島田の親友が幽霊だと思っているのか？」

「何？」

それはこの調査の根幹に関わる疑問だった。

そもそも謙二郎は半ば雰囲気流されるような形で七不思議の調査に同行——手伝う形になったのだ。自分の目で幽霊をはっきりと見たから調査に加わったわけではない。それに謙二郎自身で言えば、オカルトという不安定なジャンル自体好きな訳ではないのだ。

「最初に言ったが、俺は幽霊なんて信じていない。だからいくら島田がそうだと言っても、自殺した人間が幽霊になって？ 地縛霊になって？ そしておまけに七不思議にまでなるなんてこと、にわかには信じられない」

視界の端で傷ついた様子 of 島田少女が何か言おうと口を開くが、それを遮る形でナオが言葉を発した。

「……悪かったよ」

それは謝罪だった。

「お前を巻き込んだのは悪かったと思う。おれもついまた調子に乗ってお前をあれこれ引っ張り回した。……いやー、久しぶりに楽しかったなあ」

楽しかった。過去形でトーンの消えたその響きには、もう元には戻らないといった諦めが色濃くにじんんでいるようだった。それに、

「また？ 久しぶり？ お前やっぱりー」

謙二郎を相棒と呼ぶこの少年とは、今日が初対面ではない。

窓の外を苦虫を噛んだような顔で見ながらくせ毛をいじくるナオに対し、確信を以て詰め寄ろうとする謙二郎だったが、その伸ばした両の手は宙で止まった。

「呼んでる」

ぞくりと。氷のように冷たい声が謙二郎の背中を刺した。

「島田？」

「入鹿ちゃんが……呼んでる」

見れば後輩少女が一段一段階段を上ってくる場所だった……のだが、その顔から表情は消え、血走った目はあらん限りに見開き、視界に映るはずのナオも謙二郎も見えていない様子だった。

「行かなくちゃ……呼んでる……」

「おい、落ち着け。何を言っているんだ？」

階段を塞ぐ男二人の真ん中を割るように、小柄な少女が迫ってくる。尋常ではない様子で謙二郎は一瞬言葉を失っていたが、我に返ると少女を通さないように両腕を広げた。

しかし、

「え」

彼女の身体は腕を伸ばした謙二郎の身体を、通り過ぎた。

「行かなくちゃ……入鹿ちゃんが……」

そのまま脇目も振らずに鍵のかかった屋上の扉の前まで上り切ると、立ち入り禁止の表示が見えないのか、鍵の閉まっている扉に向かって躊躇いなく歩みを進め——扉を開けずに屋上へと出て行った。

「おい……ナオ。なんだ、今の……」

「悪かったよ。言ったらますます手伝ってくれないかと思ってな」

他人が自らの身体を通り抜けるという異常な体験をして、今度こそ口を馬鹿みたいに開けることしかできない謙二郎にナオは再び謝る。視線を向けると、日の落ちた窓際で、亡霊みたいに青い顔をして立つナオと目が合った。

「いいか、華ちゃんはー」

謙二郎はは幽霊など信じていない。

「幽霊だ」

水泳部の少女のように壁抜けなんて器用なことは出来ないで、ナオがどこからともなく持ってきたラジオペンチで針金を切ってアルミ製の扉を開けた。一枚隔てた扉の向こうは魔界村——なんてことはなく、月明かりは分厚い雲によって覆われ、空との境界が曖昧模糊としてはいたが、そこにはただコンクリートの屋上が広がっているだけなのだった。

右手側には現在は使用されていない円筒形の給水塔。落下防止フェンスなんてものはなく、人の腰までの高さしかない、のっぺりとした灰色の壁の向こうは硬い地面が不気味に手招きしている。不気味。その三文字がしっくりくる世界だった。

「おい相棒」

「相棒じゃない。なんだ」

「怒ってんのか？」

「見れば分かるだろう」

一息。一拍の間。

「俺は気が狂いそうだ。他にも隠してることがあるなら全部吐け」

「……まあ、そのうちな」

「あるんだな」

ゆっくりと歩みを進める二人の視線の先では、一頭のイルカが屋上に横たわっていた。向こう側の見える半透明な姿で横になっているイルカのそばでは、見覚えのある少女が苦しみを分け合うようにその胸に抱きついていてた。

「さすがに俺でも驚いたぞ。笑って泣いてやかましい後輩だと思っていたが……それでもまさか幽霊だなんてな」

「まだ死んじゃいないさ、いわゆる生霊ってやつだ。七不思議の《寒い廊下》は華ちゃんがいるからかもな」

だから今日は気温が低く感じたのか、と謙二郎は呟く。霊を自分の両目で見てからは、不思議な現象にも寛容になった気がしていた。というより、単に感覚がマヒしただけなのかもしれない。

「もっとも、万が一にも死なせないように俺はここにいるんだがな」

「島田の身体は今どこにあるんだ？」

「医大病院の集中治療室だ。数日前から高熱が続いていて意識が戻らない。抗生物質も何も効かなくてな……このまま熱が引かないと危ないそうだ」

「だから、今日中か」

「ああ。悪いな、巻き込んで」

「いつものことなんだろう？」

「……そう、だな」

二人の少年が歩いてくるのを感じ取ったのか、半透明のイルカは激しく鳴き声を上げる。遺伝子に刷り込まれた原始の記憶がそうさせるのか、もはや人のものではない甲高い鳴き声を上げて、まるで大切なものを手渡すまいとするように、イルカは島田の華奢な体をその尾ひれで包み込む。

「それにイルカ、ねえ。あの七不思議を流したのもお前か」

「……いつから気が付いていた？」

「そのセリフだとまさに推理小説の犯人だな」

ナオは少しだけ歩調を緩める。

「はん。探偵が実は犯人なんて叙述トリックは、とっくの昔に使い古されたネタさ」

「ノックスの十戒はいいのか？」

「おいおい、ありゃ九十年近くも昔のルールだぜ？ つーか良く知ってんなぁそんなマニアックなことまで」

「お互いな」

「違くない。で？ いつからなんだよ。ひょっとして犯人に真相は教えないってポリシーか？」

顔を下から覗き込むナオに、溜息一つ挟んで、謙二郎は話す。

「音楽室で《嘆きのバッハ》の他にもいくつか肖像画があっただろ」

「ああ」

「バッハの右側の人物画をこれは絶対にショパンだと言い張っていたやつが、じゃあシューベルトの方も調べると言われて、右側に椅子を置く間違いをするわけがない」

「あ」

最初から小型スピーカーのある場所を知っている人物以外は絶対に間違わないのだ。

謙二郎に言われてナオは自らのコンプレックスを両手で掻きむしった。

「だーっ！ くそう、なんかお前の方が探偵っぽいな。仕方ない、悔しいが名探偵の座は譲ってやる」

「いらん。それに、お前の考えてそんなことくらい分かるさ」

「ガキの頃からの長い付き合いだからなあ」

謙二郎はもう、その意味を深く聞こうとはしない。

イルカまでの距離は僅かもない。

時間も、あまりないようだった。

「だが、お前が七不思議なんて面倒な工作をした理由はなんだ？」

そこは謙二郎自身、この事件の全体像に上手く当てはまらないピースの一つだった。

大和田入鹿が屋上から飛び降りて、島田華が後追い自殺未遂を図る。そして方や地縛霊に、方や生霊になって学校を彷徨う。そこにわざわざ七不思議なんてものを介入させる理由がないのだ。

「この目を見たからにはオカルトだろうが何だろうが多少は許容してやらないこともないが、島田の霊を救うにしても、大和田入鹿を成仏させるにしても、あんなまどろっこしいことをする必要はないだろう」

そう彼を――山田直生という高校生をよく知ってるはずの眼鏡の少年は言った。

「それは……おまえにや来世くらいまでは教えられないな」

「さっきそのうち教えると言ったろう」

「来世なんて俺にとっちゃそのうちと同義なんだよ！」

唾を飛ばしながら食ってかかるナオに、謙二郎はやれやれと肩をすくめる。見方によっては喧嘩をしているようにも見える掛け合いは、不思議と懐かしさを伴って謙二郎の心を穏やかにさせた。もうイルカは目の前だ。

「言葉は通じるのか？」

「通じる。いや、通じてくれなきゃ困るな」

二人は足を止める。イルカも諦めたように動きを止めた。視点の定まらない虚ろな目をした島田がこちらを見上げた。

「先輩」

やっと聞き取れるくらいの酷い掠れ声だった。

「華ちゃん。さ、そろそろ帰ろうか」

「先輩……」

折膝になって目線を合わせたナオが、優しく後輩少女に微笑みかける。

「大和田入鹿は死んだ。でも君はまだ生きている」

「……でも、入鹿ちゃんが私を必要としているんです」

震えるかすれ声で少女は言う。イルカは何も言わない。

「昔からずっとずっと一緒だったんです。私が、私が一緒にいないと入鹿ちゃんは――」

「そうやっていつまでも彼女に甘えるな」

声音は変わらないはずなのに、ナオの一言は島田の表情を凍らせた。

「ナオ……先輩？」

ナオは笑う。その深淵のような黒い瞳は笑ってはいない。

「いいかい華ちゃん。一度死んだ人間はもう帰ってこないし、ずっと一緒にいるわけにもいかない。いくら君が相棒に依存していても、死んだ人間とはもう住む世界が違う」

彼女にもう君は必要ない。

大和田入鹿がではない。ナオは、依存しているのは君の方だと水泳部の少女を指摘する。

「そんな……で、でも、私が依存してたからって、だから何だっていうんですか！ 親友が何も言わずに先に死んじゃって！ 頭の中ぐちゃぐちゃになって！ もうどうしていいか分かんなくなって！ 何もかも上手いかなくなって！ せ、先輩なんかそんな私の気持ちが分かるっていうんですか！」

「分かる」

ナオはヒステリーのように叫ぶ島田の、血を吐くような言葉の束を一刀の元に切り捨てた。その迷いのない言葉に島田の肩がびくりと震える。

「な、んで……」

「分かるんだよ。俺にも」

隣で横顔を見ていた謙二郎には、ナオの顔に深い悲しみの色が差したのが分かった。

「でも！ でも！ 入鹿ちゃんだって私と一緒にいたいはずです！ 住む世界が違うっていうなら、私があっちに行けばきっと――」

「華ちゃん」

ナオに救いを求めるように必死に詰め寄る島田を制して、ナオは静かに言う。

「彼女はそんなに弱い人間じゃないよ」

くせ毛の少年が指をさす方を見れば、もうそこにイルカはいない。代わりに立っていたのは、黒い真っ直ぐな髪を背中まで伸ばした、まだあどけなさの残る制服姿の小柄な少女だった。

「入鹿ちゃん……」

「華ちゃん。うん、ごめんね」

鈴を鳴らしたようなよく通る声だった。

「い……入鹿ちゃん、私、私ね？ 入鹿ちゃんと一緒に行くよ？ どこでもずっと一緒だよ？」

反対に、水泳部の少女の声は泣きはらしたような酷い声で言う。

「華ちゃん。ねえ、私の話聞いてくれる？」

イルカだった少女は、言葉に愛情と慈しみを目一杯込めて、立ち上がって己の手を取る少女を見る。

「何？ 何？ わたし今なら何でも言うこと聞いてあげるよ？ ほら、あのモールのかわいいって言ってたスニーカー買いに行こう？ 今度食べようって言ってた三段アイスだって奢ってあげる！」

一緒に七不思議を追いかけて、先程まではつらつとしていた少女の余りにも変わり果てた姿にいたたまれなくなり、謙二郎が思わず目を背けると「相棒」と声を掛けられた。

「お前は最後まで見届けなきゃだめだ」

その台詞の意味を深く考えることなく、謙二郎は逸らした視線を再び二人の少女へと戻した。壊れた人形のように口から際限なく意味のない言葉を発し続ける島田を、微笑みながら無言で大和田が受け止めていた。

「わたしね、今年こそは海に行きたいんだ！ やっぱりたまには学校のプールより広い場所で泳ぎたいし。」

あ！ そうだ！ 水着も買いに行こうよ！ おニューの水着はビキニでも買おっか？ きわどいので攻めようよ？ なんてね。入鹿ちゃんはどうする？」

「華ちゃん」

「何？ 入鹿ちゃん」

「私ね」

親友の発した言葉は、残酷だった。

「華ちゃんのこと、ずっと嫌いだったの」

「――え？」

理解が追いつかない様子 of 島田。絶句する少女に、静かに微笑む黒髪の地縛霊は淡々と続ける。

「いつも思っていたの。私は華ちゃんの影。表舞台には決して出ない黒子。華ちゃんはクラスでも水泳部でも人気者だし、何でも一人で出来る太陽みたいな子。でも私は？ これといった取り得もないし、根暗だし、お洒落だって全然分からない。でもね？ それが今ではどう？ 学校中の話題は私で持ち切り。誰もが私のことを知ってるの。新聞にだって載ったんでしょ？ 今まで大輪の華に隠れていただけだった私が、ようやく光を浴びたのよ」

だからダメ。黒髪の少女は島田の手を優しく突き放した。

「ようやく手に入れた私の幸せに、あなたはいらぬ。だから、ごめんなさい」

途方に暮れる島田に入鹿はとどめとばかりに、後ろ手に満面の笑みで言葉を突き刺す。

「大嫌いだよ、華ちゃん」

すとん。膝からコンクリートの屋上に崩れ落ちた少女の表情は、謙二郎からは窺い知れない。しかし、そのまま何も言葉を発することなく、身動き一つせずに、水泳部の少女はすうっと消えてしまったのだった。

「いやはや、女子って怖いわー」

場違いな声と台詞に謙二郎が我に返ると、ナオが笑いながら一歩踏み出したところだった。

「馬鹿！ そんな呑気なこと言ってる場合じゃ……」

「華ちゃんなら大丈夫。きっと今頃病院で寝てる自分の身体に戻ったと思う。これで熱も下がるだろうさ」

「心が立ち直るには時間が必要でしょうけどね」

見れば地縛霊のイルカ少女も変わらず微笑んでいる。どうやら状況が分からずにいるのはまたもや謙二郎だけなようだった。

「ありがとうございました、先輩」

先に口を開いたのは、大和田入鹿だった。

「礼はいらぬ。今回はお互いさまだしな」

「まだそちらは解決していないご様子ですが……」

ちらりと謙二郎の方を見る。

「十分さ。あとは俺の問題だ」

「そうですか」

互いに多くは語らないようだったが、山田少年がこのイルカ少女と面識を持って今回の騒動を仕組んだらしいことは分かった。恐らくは地縛霊の説得という前提自体が間違いで、本当の目的は大和田入鹿に依存していて後追い自殺未遂までした島田華の、文字通り目を覚まさせるための荒療治……といったところだろうか。いらんとは言いつつも少しうれしかった名探偵よろしく、謙二郎はそう推理した。

「これで七不思議も全部解決か」

「あら？ 七不思議は七つだけとは限りませんよ、田中謙二郎先輩」

「俺を知っているのか」

「さあ、ナオ先輩にでも聞いてみたらどうです？」

謙二郎が口を開くと、イルカ少女からそんな言葉が返ってきた。そのニュアンスには若干の敵意のようなものも含まれている気がした。それによく見るとイルカ少女とはどこかで会ったような気もする。ナオの事といい、自分の記憶力に一抔の不安が残った。

「大和田。俺が何かしたのなら謝るが」

「いいんです。全部終わったことですし。私もう、恨んでいませんから」

「否定はしないんだな。なら俺に出来ることはあるか？」

「そうですね……では不束者ですが、来世では末永くよろしくお願いしますね。先輩」

「おい、ナオ！」

少女の黒い笑顔の裏側に渦巻く何かを察した謙二郎が、助け船を期待しつつ隣を見ると、くせ毛の少年は満足そうに片手を振っていた。急いで視線を正面に戻すが、そこにはもはやだだっ広い屋上の灰色が広がっているだけだった。

「どいつもこいつも……」

「ははっ！ 来世じゃ結婚でもしてやるんだな」

「さて」

探偵が言う。

「ここからが本当の解決編だ」

「急に何を言い出したか知らんが、本当に解決するのか？」

疑わしげに助手は言う。探偵も、少し困りながら言う。

「んー、多分な。俺はホームズなんだろ？」

「名探偵 皆を集めて さてと言いか。お前はホームズよりどっちかっていうとモリアーティ側だろう？」

「ほら、悪い顔してるぞ」

「それくらいは知ってるのな。まあ天才的な所は否定しないが……どうせなるならオレは悪のプロフェッサーよりグレートなティーチャーの方ががいい」

「教師？ お前がか？」

こんな時に何を言い出すのかと、助手は訝しむ。

「上から好き勝手な事を言う奴より、誰かと同じ目線で一緒に歩ける奴にずっとなりたかったんだ」

「まあ、いい台詞を言ったつもりかもしれないが……今格好つけて言うことか？」

探偵は、高らかに笑う。

「ははっ。今じゃなきや言えないことさ、相棒」

笑う。顔の前に片手を当てて、笑う。笑う。

「だって、なあ？」

悲しそうに、探偵が、言う。

「お前も死んでるんだぜ？」

それを聞いて、助手も、笑う。

「……くっ。ああそういうオチか。どうせそんなことだろうと思ったよ」

しばらく他に誰もいない灰色の屋上に、一人分の笑い声だけが響いた。

鉛の雲は晴れない。

「それで？ 解決編なんだろ。後は何を解決してくれるんだ、名探偵」

「ああ。こっからは隠し事はなしだ。まるっと解決してやる。……多分」

「そこは自信をもって言えよ！」

一度大きく深呼吸したくせ毛の名探偵は、右手は腰に、逆の手はその前髪を弄びながら、探偵が推理する時はこうだとばかりに歩きながら話し始めた。

「まず、誰かさんが新学期直前の春休みに学校前の道路で大型トラックを相手に相撲をとってから、学校の、とくに図書室周辺の空気がおかしくなった」

「本当に容赦なしにネタばらしをしていくのな……」

どこぞの名探偵のように小出ししていかない辺り、少年らしいといえらしいのだが。

昔から家同士が近かったこともあり、山田直生と田中健次郎はいつの間にか自然と遊ぶようになっていた。よくもまあこれだけ性格の真逆な二人が一緒にいられるなどは、ナオの父親の言。ついたあだ名は山田中。まあ、ひねりも何もあったものじゃなかった。

それすらもついさっき思い出したばかりなのだが。

「気晴らしにでもなるかと思って、軽い気持ちで図書室へ調べに行ってみればどうだ。死んだはずの相棒が、呑気に！ 暇そうに！ 読書に勤しんでいるじゃないの。その時の俺の気持ちを返せ！」

「そうか。本当に俺は、死んだんだな」

大げさに騒ぐくせ毛の少年を無視して、謙二郎は曇天を仰ぐ。早くも人生のゴールテープを切ってしまう

たという真実を突きつけられて、目を逸らし続けてきた無意識が破綻をきたしたのか、謙二郎の脳裏には事故直後の記憶も徐々に戻ってきていた。

信号の青。借りてきた図書。横断歩道。クラクション。空。鉄の匂い。

暗い視界。暗い心。

どうして、俺が。どうして、俺だけが。

俺だけが――。

「しかも学校の妙な空気の原因は、どうやらお前みたいだな」

「……ああ。そういうことか」

七不思議最後の一つ、《図書室の諭吉さん》。図書室で勉強していると、どこからか視線を感じるという。「幽霊。俺の方が七不思議の地縛霊だったのか」

「そういうことだ」

探偵は肯定する。

自らの両手を掲げて見ると、五本の指と手の平を透かして相方の顔が見えた。どうして今まで気が付かなかったのか。

「ならあのイルカ娘を殺したのも、俺か」

「……」

探偵は否定しない。

犯人は納得する。

なぜこうも多くの記憶が曖昧なのか。

なぜ自分は今も衣替え前の冬服なのか。

なぜナオは鍵を開けて図書室へ入ってきたのか。

なぜあの犬は自分と華ちゃんにだけ吠えかかってきたのか。

なぜ大和田入鹿は敵意を向けてきたのか。

エトセトラ、エトセトラ。思い返せば今日だけで違和感は数多くあったはずなのだ。それなのに異常を当たり前だと思い込んでいた。思い込むようになっていた。

自分の死を自覚した今なら分かる。この三階建ての学び舎において、田中健次郎という存在は、明らかにそこにいるだけで日常を歪める異質なもの。自分だけが死ぬのはおかしいというエゴから地縛霊と化した化け物。一言で言えば、害だった。

大和田入鹿を屋上から死に追いやり、島田華に後を追わせ、自分のしでかしてきたことに蓋をしてのうと名探偵を気取っていた真犯人は、そろそろ退場する頃合いなのかもしれない。

「ナオ」

「ああ、放っておいてもお前はもうすぐ消える」

さすがに腐れ縁なだけはある。謙二郎が口を開くと同時にナオは言う。

「そのために一芝居打って、俺たちでこの学校に七不思議を作り上げたんだ。七不思議の噂を流して、島田を正気に戻すと同時にお前を救うために。昔みたいに久しぶりの探偵ごっこ……楽しかったら？」

「探偵ごっこ、ね」

ごっこ。子供の遊び。確かにそうなのかもしれない。本物の探偵は謎を解くようなことはしない。探すのは証拠ではなく尋ね人やペットが主で、調べるのは現場ではなく浮気相手。必要なのは一筋の閃きと灰色の脳細胞などではなく、根気と忍耐力。そんなことは分かっていたはずなのだ。

さっきまで謙二郎たちがしていたのは所詮お遊び。大和田や島田のことだって、放っておいても勝手に解決していたかもしれないのだ。

それでも、

「ああ」

真犯人は、言う。

「楽しかったな」

「当たり前だ。俺プレゼンツだからな」

「よく言う。けどお前な、俺が絶対乗ってくるって確証はあったのか？」

謙二郎が嫌だと言ったら、そこでこのプランは台無しだったはずなのだ。

「相棒。お前、さっき自信あり気に言ってただろ？ 『お前の考えてることぐらい分かる』って。その言葉、そっくりそのまま返してやるぜ」

だから――、

歩みを止めたナオはそう一拍置いて、イルカの消えた場所で謙二郎に拳を突き出した。

「もう、満足して成仏してくれ。お前の居場所はもうここにはない」

「俺がいなくなってもナオは大丈夫なんだろうな？」

「少しは相棒を信用してやれ」

「……そうか」

そう言って謙二郎もゆっくりと、そして少しだけ名残惜しそうに半透明の拳を顔の高さまで持ち上げた。

「おい」

「おう」

「お前さっき教授より教師になりたいとか言ってたな」

「言ったか？ そんなこと」

「一六年だ」

「なに？」

「俺達三人、生まれ変わってこの学校に戻ってくるまでに、お前は本当に教師になってみせろ。お前の授業、受けてやるよ。……天才になら簡単だろ？」

「お前、もしかして――」

絞り出す、もう一度。

「楽しかったな」

その次の言葉は、ナオにも届いただろうか。

「相棒」

「謙二郎！」

突き出した拳が触れ合う瞬間、少年の目には謙二郎の姿が映らなくなった。

そして屋上には彼以外誰もいなくなった。いや、元々誰もいなかったのかもしれない。

イルカと呼ばれた少女も。

親友に依存していた水泳部の生霊も。

眼鏡で皮肉屋の相棒も。

屋上にはくせ毛の少年しかいない。

「――とんだ大仕事だ」

少年は誰にともなく呟いた。いや、独り言ではなかった。返事は自らの口からあった。

「いやー、悪かったな」

「こんな七面倒臭いこと押し付けやがって、後で覚えとけよ」

「そりゃあ一六年後だな。でも面倒って割には楽しそうだったじゃねーか。ちょこちょこ口挟みやがって」

「お前には借りがあったからな、直生。今回は仕方なしに動いただけだ」

それに、あれは心の声が漏れただけだ。そんな風に一人の口から二人の口調で言葉が紡がれる。一人は心底嬉しそうに、そしてもう一人は渋々といった様子ながらも、どことなく楽しそうであった。

「それにしても、相棒の成仏くらい自分でなんとかしろよ」

「いやあ、自分の成仏もろくに出来ないやつだからな、俺」

口調が変わるたびにくせ毛の少年の表情もころころと変わる。

「だから礼の一つも言えないのか？ やれスピーカーだ、コーラだ、って当たり前だが私情でうちから経費は下りないんだぞ。それに身体を貸すのも、これはこれで疲れるんだ」

「しっかり動画まで撮っといてよく言う。お前のバカ騒ぎはいつものことだろーが。……でもまあ、助かった。ありがとう。サンキュー。大好き。愛してる！ ちゅっちゅ……っこれでいいか？」

「おれの口を使って言うな気持ち悪い」

「言えって言ったよな！」

お決まりの憎まれ口は、照れ隠しだ。

「そういや最後の方、謙二郎のやつおれに気が付いてたぞ」

「え。マジか？」

「あいつ、『俺たち三人が生まれ変わって』とか言ってたろう。華ちゃんは今頃病院で目を覚ましてるだろうし、成仏したのは田中謙二郎と大和田入鹿。おれは死んじやいないなら、さて残る幽霊は誰だ？ それに途中からナオって呼ばなくなったてしな」

「……」

「さすが悪名高い山田中の片割れって訳だ。ほら、来世なんてすぐそこなんだろ？ さっさと行ってやれ、アイボウさんよ」

「これだから俺はお前が嫌いなんだ！ そういうことは先に言えよ！」

「名探偵は遅れてやってきて名推理を披露する。そういうもんなんだよ」

「一六年後だ！ いいか、覚悟してろよ！」

「おれがこの家業を継がなかったらな。まあ、あいつらにもよろしく言っといてくれ」

言うなり、体から重しが取れたような浮遊感と脱力感が少年を襲った。何度経験しても、この瞬間だけは慣れない。少年は、くせのない真っ直ぐで長い髪を頭の後ろで一つに縛ると、今度こそ独り言を呟いた。

「やれやれ。教師ねえ……へぷちっ」

なんとも間の抜けたくしゃみ。踵を返してもう一回。

進める歩みは重く。茶色い砂糖水で濡れた体もまた、重い。

「あー……。こりゃ明日あたり風邪だな」

鼻をこすりながら後ろ手に屋上の扉を閉める。

『オレは教師になりたかった』

。本心を謙二郎の前で口にしたのは、果たして自分かあいつか。

鈍色の雲はいつの間にか晴れ、梅雨の合間の綺麗な細い月が顔を覗かせていた。

学び舎のチャイムが鳴る。

今日は弓張月。

屋上にはもう、誰もいない。